サール・スマイル～悲しい笑顔～

憂鬱なもののけ姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サール・スマイル～悲しい笑顔～

【Ｎコード】
Ｎ４５２１Ｏ

【作者名】
憂鬱なもののけ姫

【あらすじ】
最愛の人と永遠に会えなくなった麻衣子の学校に、その彼と同姓同名の
人が転入してくる。あるところは「女遊び」、あるところは
「けなげな男子」・・・・。そんな彼に麻衣子はだんだんと心惹かれて
いく・・・。切なく、でも笑顔な麻衣子にも、「町田博之」は惹かれていく。麻衣子の運命の恋が、今始まる――――――。

1

～あなたと逢えたのは運命でした～

いつも君とじゃれあったり、悩みがあって相談したり、ときには悲しくて泣くことも。
でもあなたといれた一日一日は、とても大切で、壊せない何かがあった。私にとって
かけがえのない存在。でも私はあなたに、「わたしの事好き？」と聞いたことなんて一度もない。
彼カノだから、「一番好き」って答えが返ってくるだろうけど、答えを・・・聞きたくなかった。
私の一番嫌な答えを恐れて。「他に好きな子がいる」という答えを。
でも今は死ぬほど後悔している。なぜかって？それは自分の最愛の人がもうこの世にいないからです。
私の彼氏は交通事故で亡くなりました。いつものように私の横を通り過ぎる救急車。でもそれは
彼が乗っていた車でした。自分が彼と最期にあったのは、彼が息を引き取る5分前です。

「お願い・・・！逝かないで！！私を置いて・・・」
そう言った私に彼は震えた手で私の濡れた顔に触れ、次に頭を優しく撫でた。
分かっていた。彼が永遠に逝ってしまうことを。この優しい手で自分を撫でてくれることはもう
ないのだと。でも、諦めたくなかった。最期の、最後の一秒まで。
「麻衣子・・・、大好きだった・・・・」

そして頭に乗っている手の力が抜けたのを感じ、さらに泣いた。

そして時は過ぎ――――。

今は別の彼氏と付き合っている。でも他に彼女がいたというので、もう別れ寸前。
そんなトラブルになるときには、いつも君のことを思い出す。

・・・・私は安藤麻衣子。親はすでに2人とも他界していて、一人暮らし。
寂しいけれど、前はあの人がいた。彼は町田博之。私が一番大好きで、かっこよくて、頼れる人物。
でも博之がいなくなってからというもの、私の生活は変わった。しかし、私はまだ知らなかった。

博之との出会いに勝るもっと甘くて、苦くて、素敵な恋が始まることを。
桜の舞う季節のことだった。

1（後書き）

小説２つ目です。次話は別にの博之くんが出てきます。
これからよろしくお願いします。

2

・・・彼氏と別れた。別にこれくらいなんでもない。博之のことをずっと思っていたから。
今の別れた彼はただの気持ちのまぎらわし。だから彼も私のことを嫌ってくれて感謝している。
・・・今だに博之との思い出は、忘れられそうにない。次はどんな紛らわし方をしようかと考えている。ってか私って男遊び？でも博之と付き合ってたと時には、こんなこと考えもしなかった。
いまは仕方ない。あの人は・・・もういないんだから。

そんなことを考えていると、友達が来た。
「今日転校生来るらしいの～！ウチのクラスに。」
由理はいつもノリノリ。だからそのノリに乗せられて、ついつい私もはしゃいでしまう。
友達にはそれぐらいの人が良いと私は思う。
「え、本当！？どんな人かな～」私も元気良く返事。

「それが、超～イケメンらしいの！なんていったっけ・・・、あ！思い出した！
『町田博之』とかいう人！」

その一言で私は固まった。・・・博之と同じ名前？しかも同姓同名！・・・でも博之は
死んだはず。確かに博之は顔はいい方だったし・・・。顔までそっくりなんだろうか。
新学期だから転校生が来てもおかしくない。なんだかんだ言ってる

うちに朝のチャイムが鳴る。

先生が早速紹介する。

「えー、みんな知っているとは思うが転校生を紹介する。入ってきなさい。」

するとドアが颯爽と開き、めちゃかっこいい男子が入ってくる。でも博之には似ていない。

「町田博之です！これからよろしく！」といって黒板に自分の名前を書き始める。

字も同じだった。まったく。・・・どうすればいいの？これからこの人とどう接すればいいの？

分からないよ――――・・・・・。

2（後書き）

ここで第二の博之くん登場です。けっこうナルシスト（？）な一面もありますが、どうか温かい目で見守りください（笑）
切ない・・・っていうかけっこう意外な方へと話が進展します。
どうかよろしく。

3

・・・今でも想っている人と同姓同名の人が現れた。『町田博之』・・・不思議な巡り合わせだと思う。でも仲良くはない。彼の周りはいつも博之を捕まえようとする女子で囲まれている。性格もなんか女遊びっぽいし、ちょっとウザイとも思う。（私は女遊び？）仲良くなりたいなんてこれっぽっちもないし、向こうも美人の子と手取り足取り次々デートの予約を入れていた。

由理がちょっと失望する。「博之君って女遊びだったんだ～。少しイメージダウンかも。」
私もそれに習う。「私もそう思う。でもそんな顔してたし、最初から」
「カワイイ子しか取り合ってくれないし、普通の人とは手を結ばない感じ？私はブスっていうワケだ」
・・・・そう言う由理も、すごく可愛いと思うけど。読者モデルのクセに。そのとおり由理は
「ｍｉｒａｉ・ｄａｎｓｕ」というダンスウェアなどを中心にのせている雑誌のモデルをしている。
由理はこのウェアがとても似合うし、けっこう美人なのでモデルになったってワケ。

でも私だって・・・・。と言いたいところだけど、自分はなんの取り柄も無い。あるとすれば成績が
学年トップ。このまま卒業まで行けば首席でこの学園を出られるだろう。

学校が終わり、由理と二人で渋谷１０９のそばを歩いていると声が。

「あの・・・・モデルになりませんか？」と。

どーせ由理だろ・・・と思っていた私はビックリした。

なんと自分を指差して言っている！・・・期待していいのかな。私も由理みたいになれるって。

今回自分がモデルになる雑誌は「ガールズ・ブーム」という本。こちらは女の子系ファッションで

キメル有名な本。この雑誌にはみんなの憧れの「雨宮花恋」がいるというウワサ！

私のスクールライフもどんどん変わってきそう・・・！！

4

・・・モデルに選ばれた。美人とは思っていない私が。
それからというもの、撮影、学校、撮影というように毎日が忙しい。
でもこなしがいのある仕事だ。

今日も撮影が終わり、こっちも撮影が終わった由理と一緒に帰る。
忙しくても二人の友情は変わらない。そんな生活だった。

次の日の学校。なぜか私は博之に呼ばれて渡り廊下に向かっている
途中だった。絶対期待しないけど、
告白されても拒否するはずだった。

渡り廊下に着く。しかしまだ博之は来ていなかった。

風が私の髪を揺らす。とても心地いい。すると突然手で目隠しされ、
後ろから声が。

「だ～れだ！」　「・・・どうせあんたでしょ。」・・・ああ、
もう。こんなノリ気の人が
一番嫌。　「なんで呼び出したのよ。」ちょっとキツめに問いか
けてみる。

「ああ、それは・・・・・・。」
いきなりグイッと体を博之の方へ向けさせられる。
「それは、こういう理由・・・・・・！！」

と私に無理やりのキス。・・・自分は拒否するどころかその声も出

なかった。
でも無意識に私は博之の体を突き放していた。
「どうして・・・・・・・・。」
博之に向けて言った言葉じゃない。自分自身に当てて言ったものだった。
焦りが私の心の中に残る。一番おどろいたのが、冷たいと思っていた博之の唇が嘘のように
温かくて、包んでくれるようだったことだ。
まるで、永遠に戻らないあの人のように。
「必ず・・・っ、必ずお前に『好き』って言わせてやる・・・！」
悔しそうに博之は言い、走り去って行った。
「何なの・・・・・・・？」
今の博之の行動は。
あ、あの博之が・・・・私にキス？
「いいえ、期待してはいけない。あのキスも言葉も、行動も全て演技よ・・・・！」
と言っている自分と。
「・・・あれは絶対に自分のこと好きよ。明日になって顔を合わせればすぐに答えがでるわ。」

と言っている自分もいた。

私は今のことを由理に話した。この問題は自分だけでは解決できないのが分かっていたから。

「・・・うう～ん、嘘のように聞こえるセリフ・・・・・・。でもキスしたときは全然違ったのよね？」
親友に話しても首を横にかしげるだけだった。

唇について離れない。

彼と全く同じ。

唇から語りかけてくる気持ちも、優しさも。

その事だけは絶対に忘れないだろう。

4（後書き）

新たな展開です。
果たして読者の皆様はどう反応してくださったか・・・・・。
不安でいっぱいですが、感想が良いことを期待しています。

5

季節は夏へ向かっている途中。・・・とその前に高校生活一大イベント、修学旅行がやってくる。

なんと今回の場所はみんなが一度行きたいと願っていた「ハワイアイランズ」へ行くことになったのだ。ハワイアイランズは沖縄にある遊園地で、ヤシの木などがたくさんおいてあるめっちゃハワイアンな場所だ。

しかも3泊4日っていうから女子も男子もみんないつも以上に騒いでいた。

由理もハイテンションな性格がさらにヒートアップしていた。

「いやったあ〜！！！アイランズだよ？！あのアイランズ！！！！！」

「あ〜はいはい、分かりますよ。その気持ちは。」

由理の熱い気持ちを軽く聞き流す。

すると、いきなり由理が声を低くして私に問いかけてくる。

「あ・・・・・。そういえば博之との関係どう？きのうアレがあったからさ。」

あれというのは博之にキスされたことである。

「私に向ける視線はなんか演技っぽく感じるんだよね・・・。」

「そう？でもさっきの1時間目にずっと博之が麻衣子のこと見てるの気付いた？」

「!?」嘘、そんなの気が付かなかった。

「私は分かるわよ、麻衣子と博之の席より後ろなんだからね。」

「うう・・・・・・。困るなあ・・・・・・。」

「まあ、また見てたら報告するわ。」

「大丈夫っ!私・・・・・、別に気にしてないしっ!!博之なんて、女遊びで最低で、最悪で・・・・っ!!もう・・・・・・!!」

「ちょっ、麻衣子後ろ!!!」

「へっ?」

「・・・・・誰が女遊びで、最低で、最悪なのかな、麻衣子チャン?」

後ろを見ると・・・・博之が。

「・・・わーーーーっ!!!」と逃げ出す私を博之が捕まえる。

「コラ!今俺のことをなんて言った!!!」

「スイマセン〜、今のは冗談です、冗談。だから許して〜!!!」

「誰が許すか!!!でも、そのかわり・・・・・・」

と一旦言葉を切る。

「俺と二人でアイランズ回れよ～！！！」
と陽気に言って去っていった。

「・・・・え、えええええええぇぇ？！」
一緒にアイランズ回るって！！！しかも二人で！！！！！

「でも麻衣子は・・・どうするつもりなの？」

私の答えは決まっていた。
どんな人だろうと興味があった。

次の日。私は博之に言った。

「昨日の話・・・、ＯＫする。でも由理と由理の彼氏とＷね！！」
と言ったとき博之は本当に嬉しそうな顔をした。

そのことに胸がドキリとしたことも。

5（後書き）

さらに新たな展開。
展開広げすぎだろ・・・・と自分でもツッコミを入れたくなるときがあります。

こんな私ですが、よろしくお願いします。（＝w＝）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4521o/

サール・スマイル〜悲しい笑顔〜

2011年4月15日18時52分発行